

小論文		十四時三〇分～十六時〇〇分（一時間三十分）
問題文は、二枚目以降に記載（ただし、試験開始の合図があるまで見ないこと。）		
用紙	（問題用紙）本冊子（本紙を含む） 四枚 （解答用紙）原稿用紙 一枚 （下書用紙）A4白紙 一枚	
使用可能用具	筆記用具（鉛筆またはシャープペンシル、消しゴム、鉛筆削り）	
注意事項	■試験開始前の注意 一、試験開始の合図があるまで、この問題用紙の二枚目以降を見ないこと。 また、解答用紙にも手を触れないこと。 二、受験票は、監督者から見えるよう机上札の横に置くこと。 三、受験票を忘れた場合は、受付で仮受験票の発行を受けること。 三、筆記用具以外の筆箱・ペンケースなど、私物はすべてかばんの中に片付けること。 四、試験用具の貸し出しは一切いたしません。 五、携帯電話を使用することは、時計・アラーム等の用途を問わず、禁止します。必ず電源を切り、かばんの中にしまってください。 ■試験開始後の注意 一、試験開始後、問題用紙および解答用紙類の印刷不鮮明な箇所、落丁、乱丁、汚れ、不備などに気がついたら、手を挙げて監督者に知らせること。 二、解答用紙裏面の所定欄に受験番号・氏名を記入すること。 三、試験開始後は、試験終了時刻まで途中退室できません（お手洗い等を除く）。 四、質問がある場合は、手を挙げて監督者に申し出ること。質問は試験終了十五分前まで受け付けます。それ以降は受け付けません。 五、試験中にお手洗いを希望する場合は、手を挙げて監督者に申し出ること。その際は、他の受験生の受験を阻害しないように注意すること。 ■試験終了時の注意 一、試験終了後は、問題用紙のみ持ち帰ってかまいません。解答用紙を提出せずを持ち帰った場合は、試験放棄とみなします。 二、試験終了後は、受験票その他の忘れ物に注意すること。	

【問い】

以下の文章は、ドミニク・チェン『共に在る』のために「（未来をつくる言葉——わかりあえなさをつなぐために——（新潮文庫）新潮社、二〇二二年）の一部です。この文章を読んだうえで、次の問いに答えてください。

- (一) この文章を、四〇〇字以内で要約してください。
- (二) モンゴルの遊牧民たちの「生き様」を「日々の生活にとりいれ」るために、あなたならどうしますか？「他者と『共に在る』」という観点から自身の考えを四〇〇字以内で記してください。

解答用紙は、縦書きで使用する。

【課題文】

果てしない共有地^{コモンズ}

わたしは文化人類学者としての訓練を受けていないが、異国の地で「他者との関係性」の認識を激しく揺さぶられる体験をしたことがある。

こどもが生まれる数年前、新婚旅行のためにモンゴルの草原に住む遊牧民の居住地に一週間ほど滞在した。なぜモンゴルに行くことにしたのかといえば、わたしも妻も、モンゴル帝国を題材にした歴史シミュレーションゲームに興じながら、草原を疾走する騎馬民族に憧^{あこが}れていたからだ。また、わたしは小さな頃から、モンゴル帝国がその最盛期に獲得した広大な領土によって、東西の文明が不可逆的に接続された文化史に強く興味をひかれてきた。

わたしたち夫婦は、首都ウランバートルから西に数百キロバスで走った大草原のただなかに設営された遊牧民のキャンプを訪れた。そこで一週間ほど、現地で野生馬を捕まえて貸し出す男性から毎朝馬を借りて一日中、草原を自由気ままに走り回るという日々を過ごした。どこを見渡してもなだらかな丘陵と平原しかない世界のなかで、ガイドに従ってその時々で行き先を決めながら彷徨^{さまよ}っていると、時折別の集落を見つけることがあった。

そういう時には決まって、日本からの珍客として自分たちのゲル（遊牧民の住む円形の移動式住居）にころよく招き入れて、手作りの馬乳酒やウラム（遊牧民が作るバターのような食べ物）をふるまい、大いにもてなしてくれた。

わたしたちが出会った遊牧民はちょっと信じられないくらい気前が良かった。それは、見知らぬ他者つつがなく交易をおこなうために一千年以上をかけて獲得した知恵なのかもしれない。なにしろ遊牧民は、季節ごとに居住地を移り渡る生活のなかで、それこそ東西の異民族たちと出会ってきたのだ。頭ではそう理解したとしても、近隣の住民とでさえ交流が薄い東京のような大都市の感覚からすると、この自然な気前の良さはやはり尋常ではない。

わたしと妻はまた、現地でモンゴル風の結婚式を挙げた。夫婦ともに、億劫だという理由で家族や友人が住んでいる日本では結婚式を開かなかった薄情者なのに、この異国の地では知り合いが誰もいないから気楽でいいね、などと言いついて、滞在先の家族の方々にヴァーチャルな親を演じてもらい披露宴を開くことになった。観光客向けのサービスでたまにこういうこともするのかと聞いたら、したことがないという。

妻の父親役は当時 35 歳だった滞在先の家父長の男性で、わたしは彼のゲルまで馬に乗って参上し、美味いタバコとお酒を献上して「娘」を娶る許可を乞う、という「儀式」までさせてもらった。その後の酒宴では、近隣からも仮想の「兄弟」や「親戚」がかけつけてくれ、たまたま同時期に来ていた二人の日本人（彼らとは帰国後も友だちだ）も合わせて 20 人ほどで盛大な酒盛りを行った。

途中、モンゴルの歌をその場で教えてもらって合唱し、妻は日本の演歌やフランスのシャンソンを教えてみんなで声が枯れるまで熱唱した。わたしたちの「母」（「父」と同じく 30 代）は本当の母親のように妻を抱きかかえて歌い続け、わたしはほぼ同世代の「父」とウォッカで乾杯し続けた。「結婚式」は宴会をする口実に過ぎなかったが、それでもその晩は本当の家族のように笑いあった。

その翌日から放浪三昧で過ごしているうちに、滞在先の居住地を離れる日がやってきた。その朝、毎日馬を借りていた牧場の主（「父」の実の兄）にお礼の挨拶に向かったわたしたちは、やってほしいことがある、とお願いをされた。馬とは別に飼っている牛たちを運動させたいので、馬に乗って牛追いをしてきてほしい、という。それまでやったことのない作業だったので少し戸惑いながらも、午後の出発まではまだ時間があつたので、小一時間ほど牛たちを追いかけて回した。それから牧場に戻ると、よし、それでは最後に君たちに渡したいものがあるからついてきなさい、と告げられた。

主についていくと、一頭の白い馬の前で立ち止まった。他の馬よりも体軀が大きく、走れば疾そうな、立派なおすだ。牧場主はそこでいきなり、この馬を君たちにあげよう、と言う。一瞬何を言われたのか理解ができず、慌てたように「大変ありがたいのだけど、これから日本に帰るので連れていけません」と答えると、そんなことはわかっていて、と笑われてしまった。この馬をあげる、というのは、持って帰れ、という意味ではない。君たちが再びここを訪れる時には、君たちが自由に乗っていい。それまで、この馬を手放さずに面倒を見るから、と。

この牧場主は、いつまたモンゴルに戻ってくるかも定かではないわたしたち夫婦のために、大事な商売道具である馬を一頭確保し続けてくれるというのだ。わたしたちはそれまで、こんなかたちの「贈与」に触れたことは一切なかったので、すっかり言葉を失くしてしまった。

この白い馬は、手土産を渡すというのとは質的に異なる種類の贈与だった。物質的な財産とは普通、それを誰かに手渡した瞬間、その所有先が相手に切り替わり、そこで贈与という行為は完了する。他方で、この人が提案してくれたことは、自ら馬の飼育という負担を引き受けながら、彼が生きている限り、そしてわたしたちがそのことを記憶し続ける限り、継続される種類の贈与だった。馬の使用権、などと書くといかにも野暮ったいが、遊牧民にとっては主な移動手段でもあり、貴重な栄養源でもある馬は、

ことさら特別な価値を持っている。だから、それが権利の貸与や契約などという形式張ったものではなく、なによりも友愛の念を示すための贈り物であることに心を動かされた。

牧場主の厚意に深く感じ入りつつも、同時に自分が普段住んでいる世界で使っている「所有」や「共有」、「権利」といった言葉の定義がなんと狭く、貧しいものであるかを痛感させられ、恥ずかしくもなった。彼と抱擁を交わしてから、首都ウランバートルまで帰るバスが走り始めると、地平線に「父」が自慢のバイクに乗って、手を振りながらしばらく並走してくれる姿があった。

旅の後に学んだことだが、現代のモンゴルでは人口の半分ほどが都市部に生活しており、牧畜に従事する遊牧民は 1 割に満たないという。ウランバートルでは近代的なビルがひしめいていたし、ガイドを務めてくれた若者たちは数カ国語を操るコスモポリタンだった。わたしは少なからず、浅はかなエキゾチシズムをモンゴルという国に投影していたように思う。

それでもあの悠久の草原でつちか 培われてきた関係の築き方は、わたしが生きてきた文化のそれよりもおらかで暖かく、そして永いものだった。帰りの飛行機のなかでこの一週間の記憶を反芻はんすうしながら、彼らの生き様から学んだことをただの「旅の思い出」として大事にするのではなく、日々の生活に取り入れられないだろうかと考え始めたのだった。